
何重もの塔

日生 右月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何重もの塔

【NNコード】

N9564X

【作者名】

日生 右月

【あらすじ】

居合いの天才と居合いの名手。料理界の新星。奇怪な挑戦者。応戦者。真剣勝負。たまにギヤグ。謎の塔。塔管理人と塔支配人。不穏な影。明るい悪。信頼。信用。裏切り。仲間割れ。

「何重もの塔。毎年何千人もの挑戦者が訪れる塔だ。そして、死者の数も半端じゃない。何故かといふと、挑戦者と応戦する、応戦者が強い所為なんだ。めちゃくちゃ強い。人間とは思えないほど強いらしい。だけど、何人いるか不明なんだ。だつて、最上階まで行く人なんて、いないから。しかも、挑戦者は好きなところで応戦者側になれるんだつてさ。そうやつて別の挑戦者と戦つて自分を磨く。それから挑戦者に戻り、上の階へ行く、なんて人もいるらしいよ。だから、今現在、何人いるかは分からない。俺は最上階へ行つてみたい。そしてどんな強いやつが最上階にいるのか、会つて、戦つてみたい。そこで死んだとしても俺は別にいい。お前が嫌だと言つても俺は行きたい。いや、行く。毎年、十月一日から三十一日まで塔は開いているんだつてさ。そして、その期間内なら挑戦者が応戦者になつても、応戦者が挑戦者になつてもいいんだつてさ。逆にその期間内じやないと挑戦者は入れず、応戦者も上には進めない。よく意味が分からぬ。俺も分からない。だから十月一日に入つて、三十一日までには塔を制覇する。噂だと最上階にいる人しか、制覇したことがないんだつてさ。俺は史上二人目の塔制覇者になつてやるんだ。無理じやないさ。俺はその為に今まで修行してきた。そして、これからも修行する。俺が言いたかつたのは『とにかく俺は強くなる!』ということだよ。じゃあ、その為に俺はまた修行していくから。お前も少しば修行したほうがいいと思うぞ!」

遠い記憶。何故、覚えていたのかすら分からない、何歳だつたかも分からぬ。そんな記憶。曖昧で不自然な記憶。信憑性なんてあつたものじやない。話の順序だつて考えていらない喋り方。俺が覚えていないだけだとしても酷い。

ただ、この話を俺にした数年後にはあいつは旅に出た。折角、俺

も修行をやりはじめた頃だったのに。

あいつは強かった。師匠と同等かそれ以上強かった。俺だって師匠よりも強いとみんなには言われている。だが、あいつ程ではないだろう。でも、俺はあいつを超える。塔とやらを制覇する。

そう思っていたのも1、2年前まで。今となつてはすっかり忘れていた。

思い出したのは師匠の所為だろう。所為とは言つても思い出されてくれてありがたくも思う。ありがとよ師匠。

色々あって俺は塔に挑戦する。はっきり言つて面倒だ。だけど塔にはあいつがいるかもしれない。俺はあいつと話さなきゃいけない。俺の役目を果たさなければいけない。塔を制覇するかどうかはともかく、塔に行き、あいつに会わなければならぬ。必ず。絶対に。

記憶（後書き）

あらすじに何だか思わずぶりな単語が並んでいます。しかし、ストーリーの計画がほぼ無し。登場人物を少しメモしてある程度。完全なる行き当たりばったりな物語。その日のノリと調子によつて敵が変わつてくる。技も変わつてくる。性格も変わつてくる。もつとしつかり計画を練つてからやるべき話です。最低でも週一投稿を目指しますが、私事により不可能になる場合があります。どうか首を長くしてお待ちください。

「「」の何重もの塔、現在、何重なのか私たちにも分かりません！
ただ、最上階には世界最強と謳われる人がいるのは間違いない！
それが一発目かもしないし、何十年経つても辿りつけないかもし
れません！ 運はあなた方にあるのです！」

スー^ツ姿のおっさんがマイクを持つて叫んでいる。確か、塔の管
理人の幾重幾都とかいつてたかな。どうでもいいけど。

「あー、面倒臭え。何で俺がこんなことしなきゃいけねえんだ」

「何言つているんですか！」 雷切師匠からのお達しでしょう。必ず
達成しなくては！」

そう言つのは俺の友達の皿品碗器だ。背が低い癖に料理ばっかり
上手い。いや、料理と身長は関係ないか。

こいつは俺の方が誕生日が早いってだけで敬語を使ってくる。

「そうは言つてもなあ……。俺は家でゲームしてたり、自由に修行
しているだけでいいんだけどなあ……」

「それに、刃さんも乗り気だつたじやないですか」

「あの時はな。やつと師匠から旅に出てもいいってことだったから
な。だけど来てみる。人はうじやうじやいるわ、変なおっさんが喋
つているわで意味分からねえ」

「変なおっさんじやなくて、幾重さんですよ」

正論ばっかり言つやつだ……。何でよりによつてこいつなんだ？

料理が上手いくらいならもつと他にもいるだろうに……。

「では！ 挑戦資格獲得の為にここでバトルロイヤルをしていただ
きます！」

「はあ？ 挑戦するのに資格なんかいるのかよ……」

「仕方がないですよ。ここはちゃんと従いましょう」

「いいけどさ。バトルロイヤルだぞ。お前、戦えるのか？」

「頑張ります！」

碗器は拳を固める。がすぐに力が抜けた。「これじゃ無理だろ。資格獲得出来るのはここにいる5万人の内、5千人のみです！」いきなり10分の1にするのかよ。それにどうやって5千人だなんて数えるんだ？

「おい、碗器は俺の肩に乗れ！」

「え？ え？」

戸惑う碗器を肩に乗せる。

「絶対に落ちるなよ！」

「では！ 用意……始め！」

人が一気に動き、手に手に武器を持ち、近くの人に攻撃する。

「惨いねえ」

「そんな暢気なこと言つてないで、早く倒してください！」

「俺は戦いは好まないんだぞ」

「嘔吐かないで！ 早くしてください！」

「しょうがないなあ。

俺は左腰に差している愛刀、大業物『空切水斬』に手をかける。そして、『空切水斬』を90度回転させる。

深く息を吸い込み、

「居合い……刀背、首切」

抜く。そのまま前にいたでっかい男の首を叩く。男は何も言わず倒れる。

「こんな感じか？」

刀を戻す。

「スゴいです！ でも、まだ一人しか倒していません！」

注文の多いやつだ。注文が多いのは山猫がやつてる料理店だけでいいぞ。

息を吸う。

「居合い……刀背、全方不注意」

刀をとにかく振り回す。周りのやつらが倒れていく。半分爽快、半分退屈。やるならもつと強いやつがいい。

「スゴいです、スゴいです、スゴいです！ 人がどんどん倒れています！」

「碗器が騒ぐ。倒れるのは当たり前だろ。俺が叩いているんだから。でも、何で誰も血が出ないんですか？ 不思議です！」

「だから当たり前だろ。叩いているんだから。」

「峰打ちを知らないのか？ お前、いくらイングランド派だからってそれぐらい知ってるだろ」

「峰打ちですか！ なるほど！」

俺が『空切水斬』を90度回転させたのはそうすることによつて相手を切ることが出来ないからだ。俺は血が嫌いだしな。返り血なんか浴びたくないぞ！

でもこのやり方、殺傷能力なしだが、持ちにくくて仕方ない。何せ、普通は縦に持つて、手で掴みやすいのをわざわざ横に持つて掴みにくくしている。ビュせなら返り血氣にしないで普通に持ちたかつた……。

俺は『空切水斬』を振り回し、碗器が「スゴいです！」を182連発くらいした時に笛が鳴る。

「そこまで！ 今、立つてゐる約5千人の方は10月中であれば、いついかなる時であろうとも何重もの塔に入る事が出来ます！」

「約つて……。やっぱり数えられないんじやないか。でも、まあ、結構人數は減つてゐる。」

おつさんは塔の中に入つていく。

「休みます？」

「そうだな。俺は疲れた」

そう言つとどこから出したのか分からぬが鍋を取り出す。

「では、今からカレーを作りますから、1、2時間ほど休んでいてください」

「そんには待たねえよ！」

「ええー」

「何が「ええー」だよ。当然だろ……。」

「俺はさつさと行って、さつさと帰りたいんだ」「では早く終わらせるために腹ごしらえしましょう」

またしても正論か？

まあ、先は長い。それに塔に入つたらいつ飯を吃えるか分からな

いからな。いま、食べておくのは悪いことじやないだろ？

碗器はどこから薪を集め、火を起こす。

塔の近くの適当な大きさの石に座る。そのまま俺は塔に寄りかか

つて眠る。

挑戦資格（後書き）

最低週一投稿と言つておきながらその日に投稿です。いいで出てきました『空切水斬』。当たり前ですが、（おそらく）実在しません。さらにそれを振り回すような人は、（知つている限り）いません。ご安心ください。

何故か管理人の名前が一番最初に出てきました。計画性のなさです。そして、気づけばまだ主人公の名字が出ていませんでした。主人公なのに……。と嘆いている刃が目に見えるようです。そんな何重もの塔、次話がどうなるかは僕にも分かりません。その時の僕に訊くしかありません。それまでひづけ期待（して下さる方がいますように）！

「もちろん俺の夢は何重もの塔の制覇！　お前は？」

その時、俺は何を言つたか覚えていない。あいつと同じで塔の制覇だったかもしれない。ふざけた師匠をぶつとばすことだったかもしない。居合い切りを極めることだったかもしれない。

何にしても思い出せない。はつきりピンとくるものはない。

何故、夢の話をしていたのかも分からぬ。何故、夢を語る夢を見たのかも分からぬ。あいつがいなくなつた時に俺は全てを忘れたはずだった。なのに、今、また思い出す。何故だろう。

「あの師匠むかつくよなー。俺、師匠のことは嫌いだ」

俺だって同感だ。あんなのは師匠じゃない。人ですらない。剣士だったら剣士で自分の愛刀に執着すればいいのに、そんなことを一切しない。頑固なのに適当な師匠。

遠くから誰かが俺たちを呼ぶ。

「やばい！　師匠だ！　早く戻ろうぜ、刃！」

あいつは走る。俺は……動けない。

何故だ、何故だ、何故だ、何故だ。何でだ、何でだ、何でだ、何でだ。いつも、あいつばかり先走る。俺の先を行く。俺はあいつの後ろを歩くしかなかつた。

だが、俺はあいつを確実に越える。越えてやる。動けない俺はこころでずっと呟いていた。

「刃さーん！　カレー、出来ましたよ！　起きてください！　おーい！」

「碗器か……。いつも思つが変な名前だ。

「ああ……。今、起きる」

俺は欠伸をしながら石から立ち上がる。太陽が沈みかけている。

「もう夕方か」

「はい。大体4時くらいですよ」

「塔にはいつ入る?」

「いつでも。刃さんが行きたい時でいいですよ」

「自分の意思はないのかよ。」

「そうか。じゃあ、カレーを食べたらすぐ行くか」

「はい。分かりました」

碗器が満面笑みで返してくる。俺も自然と笑顔になる。

「どうかしましたか? 急に笑つて」

「いや、お前、いいやつだなと思ってな」

「はい?」

「気にするな」

碗器は不思議そうな顔をしながらカレーを器に移す。それを俺に渡す。

「えっと……カレー?」

「そうですよ。カレーです。ご飯はありませんからルーで我慢してください」

「何でご飯がないんだよ! なのに何でカレーなんだよ!」

「まあ、仕方ないか。ないんだつたらな」

俺はカレーを食べる。美味しい。純粹に美味しい。

「どうですか?」

「うん。美味しい」

碗器は笑う。感情表現が豊かだ。

「お? いい匂いがするじゃないか」

誰かが言う。

「食べます? どうぞ」

碗器はカレーを渡す。俺は相手を見る。

「あ……」

一番最初に倒したでっかい男だった。

「あの、首、大丈夫ですか?」

「首？ 何の話だ？ それより、このカレー美味しいな」

俺が攻撃したのを分かつてない？ どうゆうことだ。それに、あの技は受けてから10時間は師匠ですら立ち上がりがない。それをもののか、3時間で立つて、さらにカレーを食べているだと？ こいつは何者だ。

「おい、あんた誰だよ」

「おつと、まだ名乗つていなかつたね。でも、まあ、今は名乗らなくてもいいかな。俺は剣商人だ」

名乗れよ。

「剣商人ってなんですか？」

「剣の売買をする人のことだ」

「何でそんな剣商人がこんなところにいるんだ？」

「塔の中の挑戦者、応戦者に剣を売るためだよ」

毎年大盛況するらしい。

「へえー」

碗器が感心する。

「じゃあ、俺はそろそろ中に入るかな。君たちも塔に入るんだろう？」
「氣をつけなよ。縁が合つたらまた会おう」

あつという間にカレーを食べた剣商人は塔の中に入つてゆく。

「僕たちはカレーを全部食べてから行きましょうね」
鍋にはカレーがまだ残つている。

「そうだな……」

俺は剣商人のことを気にしつつ、カレーを食べた。

「そういえば、僕、カレーを作っている間も考えていたんですけど、カレーが残り一杯分となつたところで碗器が喋りだす。カレーのルーだけ、というのは中々辛かつた。

「さつきの刀背つて技なんですが

「どうした？」

「あれ、『空切水斬』を横に持つていましたよね。だから、刀の背じゃないんじゃ……」

「細かいことは気にするな」

「え、どうしてですか。教えてくださいよー」

俺はカレーを地面に置き、『空切水斬』に手をかける。それを見て何も言わなくなる碗器。お利口だ。

「じゃあ、他に気になつていたことなんですが」

「なんだ？」

俺は『空切水斬』から手を離さず訊く。

「さつきの剣商人さん。僕たちは名前聞きましたよね」

「そうだな。答えなかつたけどな」

「何であの人は僕たちには聞かなかつたんでしょうか」

「知るか。塔の中で会つたら訊けばいいだろ」

「そうですね。そうですよね！」

碗器が元気になる。

カレーを持ち、食べる。やつぱり『飯ほしい』。

「あのさ、碗器。今からでもいいから米、炊いてくれないか？」

「さあて、早くいきましょう！ あれ？ 刃さん、まだそれしか食べていないんですねか？ 置いて行きますよ」

人の話を聞け！

「さあさあ早く早く！」

そこまであの剣商人に会いたいか？

俺は碗器に促されて一気にカレーを食べる。食器を公衆トイレで洗ってきた碗器はリュックサックに鍋や食器を仕舞う。

「行きましょう、行きましょう！」

「なんでこんなにテンション高いんだ？」

何重の塔を見上げる。近くにいたけど、改めて見るとかなり高い。上のほうは雲でよく見えない。太陽がもう沈んでいて辺りが真っ暗、ということもあると思う。だとしても高いのはよく分かる。見上げるだけで首を痛めそうだ。碗器は見上げすぎて引っ繩り返っている。

「おいおい、大丈夫かよ」

ホント、なんでこいつなんだよ。つぐづく俺は運の悪いやつだ。料理が出来るならこいつが一番にしてももう少し強いやつと一緒にやらせてくれよ。そのほうが何もかもやりやすくなるはずだ。はつきり言つとこいつは足手まといだ。どうにかしてくれ。こいつがいるくらいなら俺一人でいい。いつそ、今ここで切り刻むか？いやいや、そんなことを考えては駄目だ。料理は美味しいんだ。それでいいとしよう。どちらにしろ、敵は俺が倒す。なら、味方は弱いほうが邪魔されないんじゃないか？ どうなんだろう？……。

「さて！ 中に入りましょう！」

起き上がった碗器が言つ。元気なやつだ。

塔の入り口は大きい。それしか表現が見つからない。塔に穴が開いているだけ。何なんだ、これは。

「わー。大きい！ 大きい！」

碗器がはしゃぐ。入り口ではしゃぐやつなんて初めて見た。対処のしようがない。誰か助けて。

「よし！ 行きますよ！ 刃さん！」

中に走っていく一人の小さな少年。それを呆然と見つめる大きな少年。どちらも同学年。誕生日が数ヶ月違うだけ。

「つて、おい！ 待て！」

俺も中に入つていく。

塔前談議（後書き）

結局、刃の名前は明かされず……。最初の応戦者辺りで名乗らせよう。絶対に！

そんな決意を持ってやつと塔の中に入ってくれました。次からは塔内の話です。それまで「ついで」期待！
していただけますように

「はあ、疲れました」

そりやそうだ。もう塔に入つて3時間。中は長い通路。脇には松明が火が灯されているだけで、少し薄暗い。

「もう駄目」

ずっと走り続けていた碗器は座り込む。

「俺が肩車してやるか？」

「お願いします」

碗器を持ち上げ肩に乗せる。栄養失調じゃないかと思つほど軽い。碗器が背負つているバッグのほうが重いだらつ。

「このままだと日が暮れる。少し走るわ」

「は、はい」

突つ込めよ！ とつぶに日は暮れてるぞ！ そんなに力がないのか！？

俺は走る。碗器を肩車するぐらい大したことじやない。どんどん走る。

「わー、刃さん速いです！ 速いです！ 僕よりも断然速いです！」

「そりやあ、足が俺の方が長いからな」

「包丁で微塵切りしますよ」

肩から激しい殺氣を感じる……。

「え！？ いや！ 『めん！』

そういうえばこいつは身長のことを色々言わるとキャラ変わるんだつた！ この時の碗器は超怖い！！

「『めん』『めん』『めん』『めん』『めん』『めん』！」

『めん』を連呼する。やつと殺氣が消える。危ない危ない。

というかそんなこと出来るんだつたら自分で走れよ。やつ思つたが喋らない。同じ日に会いたくない。

「あの、また一つ気になつたんですが

「また？ 何だ？」

「この塔、こんなに横に長いんですかね？」

「それは知らないぞ。でも、確かに長いな

長過ぎる。

「それで少し考えたんですが、僕たち、塔から出でるんじゃないですかね」

「えつ？」

「例えば、この通路は少しづつ、誰も気にしない角度で下に傾いて

いる、とか

「そんなまさか……」

「もう既に地下に入っているのかもれませんよ」

「それは、ない、だろ……」

突然何を言いですんだ、」いつは。

「ちょっと降ろしてください」

碗器を降ろす。バッグをゴソゴソしている。試行錯誤の末、取り出したのは取っ手のついていない筒状のコップ。それを倒して床に置く。俺たちの進行方向と同じほうに少しづつ転がって行くコップ。

「ほら……」

絶句。

碗器はコップを片付け、勝手に俺の肩に乗る。器用だ。猿かお前は。いやいや、そうじゃない。

「じゃあ、俺たちはどこへ向かっているんだ？」

「さあ……」

沈黙。

「取り敢えず、通路は一本だった。だから他のやつらだってここを通つたに違いない。ずっと行けば誰かに会えるはずだ」

「剣商人でもいい。とにかく誰か、これを説明してくれる人に会いたい。そう思いながら俺はまた走り出す。

更に1、2時間走ったあと、塔の入り口並みに大きいドアが見え

た。

「出口ですね！」

「そうだな」

また通路が続いてなければ話だがな。
ドアを開ける。中には人がいた。人だらけだつた。4千人以上いるんじゃないか？ 殆どが寝ている。ここまで長かつたから寝ているのか？

碗器を降ろす。

「何だ？」

「ここは」

「何なんでしょう……」

「ここは、塔への挑戦資格を手に入れる為の第一次試験場だ」
ドアのそばの壁に寄りかかっているカウボーイ姿の男が言つ。

「第一次試験？」

「ああ、どうやら、今年は試験を一回もやるらしい」

「お前は誰だ？」

「おつと、勝手に喋つておいて名乗つていなかつたね。俺は、塔の
応戦者、駆撃九激だ」

「応戦者？ 何でここにいるんだ？」

「ここが俺の部屋だ。そして、突然第一次試験場になつた
よく分からぬ。何を言つているんだ？」

「つまり、ここが俺の部屋だ」

それは分かる。俺と碗器は頷く。

「そして、第一次試験場だ」

また頷く。

「だから俺がここにいる」

「あ、そうか」

「自分の部屋にいるのが悪いか？」

そういうことか。

「更にどういう訳か俺が第一次試験試験官になつた。よつて只今よ

り第二次試験を行う」

「え?
じつにうじだよ。おー。

「じゃあ、やるか」

そう言つて駁撃はベルトに付けている拳銃を右手で握る。

「え、いや、は？」

「ひ…ふ…み……。おーおー、」いつ左右3丁ずつ持つてゐる。真つ当な人間か？ 帯刀してこるやつの言つことじやないかもしけないけど。

「早く構える」

碗器い、助けてくれえ。碗器を見る 固まつてゐる。くそ、俺はこつちの世話もしなきや駄目じゃねえかよ！

「構えないと先に行くぞ」

「待つた待つた。今、構えるよ

『空切水斬』に手をかける。

「不抜、鈍足」

駁撃が動いたよつには見えない。しかし、何かが飛んでくる。俺は咄嗟に『空切水斬』で弾く。

「何だ？ 今のは？」

「俺は銃系の不抜使いだ」

「重刑の差別扱いか」

「今のは俺が使う技の一つ、鈍足だ。俺が持つてゐる技の中で最も遅い」

あれで最も遅いって、じゃあ逆に一番速いのは何なんだよ。

「最も速いのを見たいか。いいだろ？」

駁撃は時計を見る。部屋の端にある大きな時計だ。

「よし、丁度いい時間だ。あの秒針が12に来た瞬間に撃とう。あれを壊しても塔の管理人だか支配人だかが用意したストックが10台以上あつたはずだ」

応戦者側つて結構待遇がいいのか。俺もなつてみたくなつた。だ

が、あの管理人は苦手だから無理だな。諦めよ。

駁撃は左手で別の銃を握る。

「あと、10秒」

「ここから秒針が見えるのがすごいな。俺には見えないぞ。

「9 … 8 … 7 … 6 … 5 …」

カウントダウンするのか。

「4 … 3 … 2 … 1 …」

0。

「不抜、神速」

バン、パリーン。と音がする。しかし、誰も動いていない。時計は……壊れている。

「すごいな」

「今のが1番速い技だ。おそらく、秒針が12のところまで止まっているはずだ」

時計に駆け寄る。秒針は12。

「確かにそうだな」

だとすれば、駁撃は秒針が12になつたのを見て、その瞬間に擊つて、1秒以内に当たつた、のか？

「なあなあ、12になる前に撃つて、12になつた時に当たつたんじゃないかな？」

「今は疑つていればいい。戦闘になればそれが本当だ、ということが嫌でも分かる」

「へえー」

興味ないな。今日見ないな。でも、不抜は見てみたい。

「他にはどんな技があるんだ？」

駄目元で訊く。

「見せてやるつ」

見せてくれれるのか！

駁撃はまた、別の銃を握る。どうやら銃によつて使える技が違うらしい。

「不抜、睡魔」

俺に向けて撃つ。

「え、ちょ、待て」

また、咄嗟に『空切水斬』で弾く ほど速く動けなかつたので避ける。銃弾は壁に当たり破裂する。壁は無傷だ。

「なんだ、威力無いのか？」

「ただの睡眠弾だからな」

「まさか、ここに寝ているやつらって……」

「ああ、お前と同じように俺の技を見たいと言つて睡魔にやられたやつらだ」

「やつぱりな。だからこんなに……」

「だが、心配するな。死んではいな。寝ていいだけだ」

「別に心配なんてしない。赤の他人だからな」

「そうか」

駆撃はまた別の銃を握る。これで右手側の銃は全部使うな。俺も『空切水斬』に手をかけておく。

「不抜、無音」

無音、つてまさか！ 俺は銃声が聞こえる前に『空切水斬』を抜く。抜いた瞬間、手応えがあり、弾く。しかし、銃声も、弾いたときにも音が鳴らない。

「無音を弾くか。かなりの腕前だな」

「弾かれたのは初めてか？ ならよかつたな、いや、これまでにも何十人かは弾いている俺が1番最初じやなかつた……。

駆撃は左手でまた別の銃を握る。俺もまた構える。

「不抜、威嚇」

バン、と大きな音がする。俺は『空切水斬』を抜く。が、手応えはない。くそ、撃たれたか。

「あれ？」

「痛くない？」

「今のはただの威嚇射撃だ」

じゃあ、技の意味がないんじゃ……。しかもその為だけの銃つて

。

「では、次は最後だ」

左手で残つた銃を握る。俺も構え直す。

「不抜、連射」

ババババババン！

俺は必死で『空切水斬』を振る。六発ほど弾丸が飛んできた。なんとか全部弾ぐ。

「連射つて一発じゃないんじゃ……。でも技は技か……」

「その通り、技は技だ。今のは六発で一発の技だ」

そんな、無茶な……。

「よし、では今度こそ始めよつ」

駁撃は両手で一丁ずつ銃を握る。片手で一発ずつ撃つんじゃないのか……。俺もまた構える。

「何重もの塔、第一次試験。開始！」

居合い系不抜

「不抜、連射、睡魔」

計7発の弾丸が飛んでくる。しかも俺の真正面に。「だが、それだけに避けやすい！」

ちょっとズレればいいだけなのだから。

後ろの壁に6つの穴を開け、1つが破裂。

「この程度ですか？」第一試験も大したことないですね～」「何だと！」

逆鱗触れ。師匠の得意技だ。使わせてもらう。尤も師匠には得意技という自覚はなく、逆鱗触れ、とい名前もあいつが付けた。

「不抜、連射、連射、連射、連射、連射、連射」

6×6。計36発が飛んでくる。今度は狙いが1ヶ所だけじゃない。というか、手がブレて色んな方向に飛んでしまっている。駆撃が激情している証拠だらうが面倒だ。

「ばつとう拔刀、つきあた突当り」

『空切水斬』を抜き、突く。計36回突く。1回ごとに弾丸を割る。

「何！？」

どういう反応の仕方だよ！と思いつながら『空切水斬』を鞘に仕舞う。

「不抜、連射、威嚇」

銃声が7発分聞こえる。1ヶ所を狙っている。これなら避けられる。こつから1発で決めよう。俺は上へ跳ねる。駆撃の真上へ。駆撃も俺を見る。

「何！？」

同じ反応かよ！と思いつながら『空切水斬』を抜く。

「不抜、九激・連射、無音、神速、鈍足」

合わせて9発。

「抜刀、電式」

これも突当りと回じく突く。上からの攻撃だと召前が変わる。どちらにしろ、銃弾を割り、そのまま重力に従つて駿撃も切る。

「ぐはっ」

だからどな反応の仕方だよ…と思ひながら更に追い討ちをかける。

「あんまり大したことなかつた～駿撃さん～面白～ものを見せてあげま～す」

逆鱗触れ。

「なん…だと…？」

結局、そんな反応ばっかりかよ。と思ひながらも、そんな反応ばっかりでいいか。と思い、止めをやす。

「不抜、脇深致」

駿撃のベルトに付いている銃を全て切る。

「お前も…不抜使い…」

「そつ。居合い系不抜使い。師匠に無理矢理教えられたんだけどね」

俺はそんなに不抜は好きじやない。

「それよりも、俺は合格だよな。ついでにあいつも合格にさせてしまいんだけど」

俺は立つたまま気絶している碗器を指差す。

「いいだろう。お前ら、2人も合格だ」

そう言つて駿撃は倒れる。電式をもろに食らつて、尚立つていたことはすじにな。まあ、結局、俺の勝ちだけだ。

俺は碗器に駆け寄る。

「おい！ 碗器！ 起きろ！ いや、立つていいから起きてるのか

？ でも、気絶しているから起きてない？ どういふことだ？」

意味分からねえ。

「はつ！」

碗器が動き出す。

「どこだ！ 駿撃！ 出て來い！ 今からこの刃さんがあ前を倒す

ぞ！」

俺なのかよ。それにもう倒したけど。

「大丈夫だ。もう倒したぞ」

「はっ！ 駁撃が倒れている！ もしや僕の力で倒したのか！」

「いや、だから俺が……」

「あっ！ 刃さん！ もう心配しなくていいですよ！ 駁撃は僕が倒しましたから！」

自慢げに言つてくる碗器。それを見て何も言えなくなる俺。

「あれ？ でもおかしいですね」

「何がだ？」

「普通、ボスを倒したりすると扉が開いたり、お姫様が出てきたり、次のステージに進めたり、お姫様が偽物だつたりするんですけどねー」

例が当たつているのかどうかは分からぬが確かにおかしい。これからどうやって進めばいいんだ？

「取り敢えず、今日はここで休みますか。他の方も寝ているようですしち」

そういえばそうだつた。俺は周りを見渡す。何人かはこっちを見ている。だが大多数の人間が寝ている。いくら睡眠弾にやられたからって何発も銃声が鳴っていたんだぞ。普通起きるだろ。

「そうだな」

だが、俺も疲れた。今日はここで休もう。

カレーで腹は減つてなかつたので俺も碗器もそのまま眠る。

居合口系不抜（後書き）

結局、応戦者が出てきたところに名乗らなかつた刃。全く自分勝手なやつ（自分が悪いのを誤魔化している。現実回避）。次はおそらく不穏な影！（いつ）期待（していく）ださいますよう祈っています）！

1日目の晩餐

『今回の挑戦者。如何でしょうか』

スーツの男が言う（塔独自回線の専用チャットで）。翻訳され、それぞれの言語になり、それぞれの人に届く。すぐさま返信する人々。

『生きのいいのが揃っている』

『またあいつは何かやつてくれそうだ』

『誰が来ても俺はあの女一筋だ』

『今回こそはあいつにかけて勝つてやる』

『新人がかなりいい』

『刀を持つた日本人。筋がよさそうだ。今回はこいつにかける』

『今年は若干少ない。しつかり勝たせてもらわなければ』

数々の返信が送られてくるのを確認するとスーツの男は微笑む。

「フツ」

『では、皆様。お楽しみください』

『1つ質問がある』

『何でしようか』

『どうして毎年、10月なんだ？ 1月でも2月でも、言つてしまえばいつ何時でもいいのではないか？』

『そうだ。俺も気になっていたんだ』

『私もですわ』

『教えてくれ、支配人』

「フツ」

『いいでしょ。ここは僭越ながら私、支配人の行方彼方がお教え
しましょ』

拍手が起きる。

『10月というのは日本では『神無月』とも言つのです』

『神が無い月？』

『どういう意味だ?』

『一説に過ぎないのですが、出雲大社という所に全国の神が集まつて1年のこと話を話し合つ月、と言われているのです』

『ほう』

『なるほど、面白い』

『よつて、何重もの塔における支配人、管理人全員で話し合い、神がない月、神頼みの出来ぬ月、自らの力だけで成し遂げる月、という意味合いを込めて10月にした、という噂があります』

『挑戦者だけの力、か』

『ムードはバツチリだな』

『まあ、一説に過ぎませんが、そういう噂があることは確かです』

『なるほど、ありがとう』

『いえ、構いません。これからも何か不明な点があればどうぞ遠慮なく言っていただければと思います』

『分かった』

『オッケーよ』

『では、私はこれで。失礼致しました』

スースの男 支配人、行方彼方は部屋を出て行く。残った人々は目の前にある豪華絢爛な料理を食べながらパソコンを睨み、時折、キーボードを打っていた。

『ここは刃たちがいる何重もの塔の地下深くに存在する、大広間』[『]
ビッグ・ザ・ルーム[』]。

武器解説 ～1日目～

空切水斬 そらきりみずきり 刀が帯刀している刀。大業物。片刃。長さ、1・2

米。柄の長さ、10・5釐。幅、5釐。重さ、2匁。鞘の色、水色

と青に黒い筋入り。刀身の色、黒。

連射れんしゃ 威いかく 無音むおん 睡魔すいま 神速しんそく 鈍足どんそく
駆撃の銃の1つ。色、黒。最も遅い弾を放つ。
駆撃の銃の1つ。色、白。最も速い弾を放つ。
駆撃の銃の1つ。色、ピンク。睡眠弾を放つ。
駆撃の銃の1つ。色、紫。音が無い弾を放つ。
駆撃の銃の1つ。色、赤。音が鳴る弾を放つ。
駆撃の銃の1つ。色、黄色。六発の弾を放つ。

武器解説 ～1日目～（後書き）

短い！しかし、物語中で1日が終了した際にこのよ'りなのを毎回、更新していきたいと思います。単位が寸や貫ではないのは、舞台は現代という設定だからです。ご了承ください。

次話は2日目～「ひづ」期待（してくださらないとも泣かないはずです）！

「刃さん！ 起きてください！」

碗器の声が聞こえる。昨日からこの台詞を聞くことが多くなつて
る気がする。

「ん？ どうしたんだ？」

俺は起きる。そして周りの異常に驚く。

「な……何があつたんだ？」

昨日、ここに来たときに寝ていた人たちが全員いなくなつて
いる。

「どういうことでしようか、刃さん」

「俺に訊くなよ」

見渡すと俺たちと同じように困惑している人は誰もいない。

「掃除人だ。掃除人が塔の外にやつたんだ」

誰かが俺たちの後ろで喋る。駿撃だつた。

「駿撃さん！ あなたは大丈夫だつたんですか！」

「ああ、俺はな。」

「掃除された人は無事なんですか？」

「勿論だ。俺も何度か掃除されたことがあるがその時は傷はおろか
骨折して、内臓が破裂していたのに治つて塔の外に寝かされていた。
ご丁寧に寝袋に入れて風邪を引かないようにしてあつた」

「骨折に内臓破裂って、何があつたんですか？」

「ガキにやられた」

歯軋りしながら言つ。相当悔しかつたらしい。

「子どもがいるんですか？」

「お前と同じくらいだぞ」

「僕、何歳に見えます？」

「8、9歳？」

次の瞬間、駿撃がフライパンで殴られる。やつたのは碗器だ。

「うわっ！」

「失礼ですね！ 僕は15歳ですよ…」

「えええー」

駁撃が頭を擦りながら驚く。

「12月で16歳になります」

「じゃ、じゃあ、お前も15か16なのか？」

「俺は16歳だ」

「俺はまたガキにやられたのか」

駁撃が項垂れる。ガキって何だ、ガキって。

「ということは8歳くらいの子どもで応戦者の人もいるんですね」

「いる。俺が挑戦してた頃は3人目だった」

「何で挑戦しないで応戦者側になつたんですか？」

「ガキに負けたからだ」

「ふうん」

碗器はあまり興味がないようだ。というか、それ以外のことに興味がいつたようだ。

「あの、1つ訊いてもいいですか？」

「何だ？」

「昨日、あなたは僕が倒しました。なのに、何故もつ起き上がりつてられるんですか？」

「俺はお前にやられた、というかお前と戦つた記憶がないぞ」

駁撃も碗器も不思議そうな顔をする。碗器の記憶が間違っている。

「まあ、俺が受けた傷もお前らが受けた傷も全て治つてている」

「俺はお前から攻撃を受けた記憶はないぞ」

俺はすかさず反論。聞かない駁撃。

「そこら辺は治療人が治してくれるんだ」

「治療人？ そっちも誰も見たことがないとか言うんですか？」

「ああ、誰も見たことがない。だが、挑戦者も応戦者も傷や骨折、持病、感染症、頼めばアレルギーですら治してくれる」

「頼めばってどうやって？ 誰も見たことがないのに」

「寝る前に紙に『アレルギー治療求む』って書いて枕元において寝

ると朝にはすっかり治っている「すごいな」

普通に感心。

つて、そんな話をしている場合じゃないぞ。

「話を戻していいか?」

「えつと、何の話だつた?」

「掃除人」

「あー、そうだつたな」

「俺はお前を倒したぞなのに何で掃除されないんだ?」

「俺は応戦者だからな。掃除されるのは挑戦者だけだ」

「その掃除人つて誰なんだ?」

「知らない。俺も見たことがない。掃除人だが人じやないかもしれない。だが、誰もがそう呼んでいる」

人じやないかもしぬれない誰も見たことがない掃除人。とてつもなく強そうだ。

「あのさ、お前が知つている限りで一番強いのは誰だ?」

俺は駿撃に訊く。

「あのガキが来る前年はガキに邪魔されないでかなり上までいった。だが、お前と同じような居合使いがいた。あいつは桁違いに強かつた。ガキ以上だな」

「で、その人に負けたんですか」

「悪いか!」

駿撃が碗器に向かつて叫ぶ。だが、俺は聞いちゃいない。

「居合いか……。やつぱりここにいるんだな」

俺は呟く。

「何だ? あいつと知り合いなのか?」

「お前には関係ない」

「あつそ」

もつと食いついて来ると思ったが予想外に全然来なかつた。結構、人のことを考えているのか?

「気にならないのか？」

「俺に関係ないことはどうでもいい」

「かなり自己中心的なやつだった。」

「まあ、更に上は西条東路せいじょうとうろだな。あいつは人とは思えないほど強かつた」

「そんなやつと戦つたことがあるのか！」

「俺は驚く。こいつ、強いやつと戦つてきているんだな。」

「いや、お前らくらいのガキの頃、テレビで見たことがあつただけだ。もう顔も覚えてない。だけど、滅茶苦茶に滅茶苦茶強かつた」

「戦つたわけではないらしかつた。紛らわしいやつだ。」

「でも、僕は見たことありませんよ」

「そうだろうな。12、3年くらい前から行方不明だ。しかも、10年くらい前に死亡説が流れたんだ」

「それじゃあ、知りませんね」

「他には雷切つてやつも強かつたな」

「雷切だと！？」

「雷切？！下の名前なまへは割地かつちか？」

「ん？知つてているのか？」

「ああ、俺の師匠しゆくだ……」

「妙に言いにくい名前のやつだつたし、妙に強かつたし、妙に愛刀を粗末に使つてたから覚えてる」

「確かにあの師匠は妙だ。」

「その時の愛刀は何だつたんだ？」

「えつと、俺が戦つた時は確か、最上大業物の『火碎地爆かさいちばく』じゃなかつたかな」

「『火碎地爆』？ 聞いたことないな」

「僕もありません。多分、前の刀じゃないでしょ？」

「前の？ 今は違うのか？」

「違いますね」

あの師匠は愛刀に対する執着がなさ過ぎる。

「ふうん。まあ、今の俺には関係ないな

「だろ？」「

「愛刀と言えば、おいお前！ よくも俺の愛銃たちを…」

愛銃なんて言葉があるのか！？

「あ！ いたいた！ 駁撃さーん！」

遠くから声が聞こえる。俺たちは声が聞こえた方を見る。
剣商人だつた……。

異常事態と強者談義（後書き）

2日目突入！これからどんどん強いやつが出てくる予定です！（駆撃も十分強いです）密かに分かりやすいように章分けもしました。他の新連載も始まってしまって、こちらの更新が遅れるかもしれません。しかし、「いつ」^{あからせじかうせ}期待お願いします！

「やつと見つけたよ。駁撃さん。昨日はびつも。いつも通り、掃除人が色々やつた所為でどこにいるのか分からなくなつちやつて」「そうか。だが、あなたは俺には関係ないだろ」「そうだ。こいつは剣じゃなく、銃だ。」「いやいや、俺は今年から銃も扱うようになったのさ」「それはよかつた。早速俺の銃を頼みたいんだが」「えつと、鈍足、神速、睡魔……あと何だっけ」「連射、無音、威嚇だろ」「ふうん」

俺が言つ。そこでやつと剣商人が俺と碗器に気づく。「おお！ 君たち！ もう縁があつたな」「あんた、知り合いなのか」「塔に入る前にカレーを貰つたんだ」

駁撃は興味なさそうだ。「じゃあ、これが銃。6丁で120万だ」「高いですね！」

碗器が驚く。「当然だ。塔払いです」「了解！ 毎度、ありがとうございました！」

「じゃあ、俺は少し休む。どうせ、暫くは誰も来ないだろ」「駁撃はそう言つと部屋の脇の方へ行き、座つて銃を磨き始めた。「そういえば、剣商人さん」「碗器が訊く。「ん？」

「何で、最初に会つたときに僕らの名前を訊かなかつたんですか？」

「え？ あ、ああそうか。いや、だつて君たちの名前は知つているからね

「知つてゐる？」

「どういうことだ。

「俺は塔公認の剣商人だから、参加者のリストを持っているんだ」

「へえ。でも、誰が誰だか分からぬじやないですか」

「分かるよ。君は刃君だな」

「え、はい」

「何で分かるんだ？」

「君のその刀は『空切水斬』だな。それを持つてゐるのは刃君しかいない」

「じゃあ、僕は？」

「君は碗器君」

碗器が嬉そうな顔をする。

「背が低く、8歳くらゐに見える。これが特徴だな」

碗器は凹む。

「ちょっと、刃君の『空切水斬』を見せてござりん」

剣商人が言う。仕方なく渡す。

「うん、本物だな」

「当たり前だる」

剣商人は『空切水斬』を抜く。刃を観察する。

「ううん……」

「どうしたんだ？」

「勿体ないな」

「勿体ない？」

「それはどういう意味なんだ？」

「これ、ちゃんと磨いてないね」

「そういえば、手入れを一切していなかつた。

「別に、そんなことをしなくとも切れ味は落ちないからいいじゃな

いか。俺の勝手だ」

「お前の勝手で刀の価値が落ちたら駄目だろー」

怒られた。

「それに、今は大丈夫でも、この分だとあと一週間で切れ味が一気に落ちるな」

「え？」

俺も碗器も驚く。

「それはどういふことだ？」

「いや、実際は今も落ちてきている。初期状態に比べれば切れ味は5分の1だな」

5分の1！？ そんなに落ちてているのか。

「ちゃんと磨かないのが悪い」

剣商人が自分のバッグを漁る。

「確かに持つてきてたはずだぞ。えつと、どこだ？」

5分後。剣商人が小さな刀を取り出した。

「これは業物の『研磨』ときみがきと言つてな、これを使つと切れ味が抜群に上がる。ためしにやつてみるか」

剣商人が『研磨』というやつで俺の『空切水斬』を研ぐ。そして磨く。

「これでいいだろ？ 何か切つてみろ」

俺は『空切水斬』を受け取る。碗器がキヤベツを取り出す。

「これを千切りしてください」

碗器からの要望に答えてやる。俺は『空切水斬』を構える。碗器がキヤベツを投げる。

「居合い、わくあい裂羅波来」

空中でキヤベツを千切りにする、つもりだった。『空切水斬』を鞘に戻す。

「キヤベツが……ない？」

碗器が驚愕する。そして俺をじやす。

「刃さん！ 僕のキヤベツをどこにやつたんですか！ 今日はトンカツを作る予定だったんですよー 縁起を担ぐために！」

だったら、昨日のカレーのときにやれよー そうしたらカツカレーになるだろ！

「これはすごいな」

剣商人が感嘆する。

「君に腕はすごい。いくら切れ味を良くしたからって、これは下を向く。つられて俺と碗器も下を向く。
え、これって……」

「マジかよ……」

螺旋階段

「やっぱり元々切れ味がいい刀なんだよ」と、下に落ちたキャベツというか、どう見てもただの緑の粉を見ながら剣商人が言った。

「切れ味とかそういう問題じゃないと思つぞ。これは……」

こんなものを振り回してたらこの塔だつてどうなるか……。

「この『研磨』を碗器君にあげよ!」

「え、いや、でもお金は……」

「あげるって言つただろう」

碗器は『研磨』を受け取る。

「これで『空切水斬』をしつかり手入れしてやりなさい」

「は、はい！」

碗器が敬礼する。

「じゃあ、そろそろ上に行ける時間かな」

「時間?」

その時、天井が開いた。そして、螺旋階段が降りてくる。近くへ寄る人々。と言つても数人しかいない。

「何ですか、あれは!」

「1日目は掃除人が掃除をしやすように絶対1人目で終わりなんだ。ここで負けた人が上に上がらないようにな」

「いや、そうじゃなくて。あの階段は何なんですか!?」

「今年は螺旋階段だね」

「今年は? 去年は違うんですか?」

「去年はエスカレーターだつた」

「そつちの方が最新、……」

「あれは、どうゆう仕掛けだ?」

碗器と剣商人が話しているのを横で聞きながらも俺の目は螺旋階段に釘付けだつた。

「さあな。だが、次の奴は機械、といふかカラクリ好きで、こいつのをやつてるんだ」

「すげえな」

「これで70過ぎの爺さんなんだから驚きだよな」「70過ぎーー?」

「爺さんーー?」

剣商人が頷く。

「そして、駁撃さんの祖父だ」

「えええええーー!?」

俺と碗器が同時に驚く。

「もう年だから不抜は使えないが、それ以上にカラクリがすごい」「強いんですか」

碗器が訊く。

「戦つてみれば分かるさ」

剣商人がウインクしながら言つ。

螺旋階段が床に着く。一斉に上つて行く数人の人々。

「俺が先だ!」

「いや、俺だ!」

「じゃあ、俺が!」

「どうぞ、どうぞ、どうぞ!」

何だあの会話は……。

「よし、上るか

剣商人が先導し、螺旋階段を上る。途中で止まる。

「どうしたんですか?」

「伏せる」

俺たちは剣商人の言葉に従つて伏せる。すると、頭上をさつきの挑戦者が飛ぶ。

「何が起こってるんだ!?」

俺と碗器は呆然と見ていた。

螺旋階段（後書き）

またしてもキリが悪いところで終わりました。（続きを気になるようになります）

うにする作戦と思われるかもしれません）

次回の何重もの塔、2人目の応戦者！ 70過ぎのお爺さん！ どんな戦いになるのか！ それまでひつゝ期待（してください、純粹に）！

「よし、行くぞ。ここからは九激さんと訳が分からなくなるから駆撃一世と言おう。分かつたか？」

頷く。剣商人の後ろについて一気に上る。勿論、柄から手を離さない。抜きやすいうように刀自体を腰からも外しておく。

上りきつた瞬間、鉄球が飛んでくる。咄嗟に左手を振つて、鞘で鉄球を弾いた。

「ほう。若いもんにしてはやるな」

声が聞こえたほうを見るとそこには、カウボーイ姿の爺さんがいた。爺さんは椅子に座っていた。その椅子の近くには様々なボタンが置いてある机がある。そこに右手を添えている爺さん。確實に鉄球はこの爺さんの仕業だろう。

「わしは駆撃 げきりん 激燃。気軽にゲキリンッ、と呼ぶのだ」

「ゲッ、キリン……」

碗器がボケた。と、思つ。天然じゃなかつた場合。

「あ、今のさつきのは僕が苦手なキリンが嫌いなのにお爺さんが今さつきキリンとか言うからゲッ、となつたんです」

天然だつた……。今の説明いらないよ碗器君。意味を受け取りにくい口調だつたよ碗器君。気が動転していいないかい？

「おお、剣商じゃないか！」

駆撃一世が剣商人を見つけたようだ。

「駆撃さん！ 1年振りですね！」

剣商人の顔が商売モードになる。のを分かつてしまふのは、あまりいいことは捉えたくない。というか、この爺さんに武器を売る必要あるのか？ 鉄球か？

「今は特に必要ない。また、あとで頼むよ」

剣商人が悔しそうな顔をしながら「かしこまりました」と言つ。なんか嬉しい！

「これはわしが作ったのだ」

勝手に駁撃一世が話し始める。

「長くなるぞ。口の中で噛み切らないよつて舌歯んどけ。眠気覚ましになる」

剣商人が言う。一応、言う通りにする。

「作りを思いついたのは一五の頃だつたのだ。そこから構想を広げ、練り、検証した。そして、二三年もの歳月を掛けて作られたのがこの『崩訪砲』。漢字で書くと、『崩』が『訪』れる大『砲』なのだ」

「崩れが訪れるんだつたらこの大砲が壊れるんじゃ……」

碗器が余計なことを言う。

「そうか！じゃあ、改名するか。うむ。『宝封砲』でどうだ。漢字で『宝』を『封』じる大『砲』。これなら文句ないだろ？」
でも、どう見ても大砲とは思えない。ほほ戦車だ。
「では、勝負と行こうかな。誰から勝負なんだ？」

「俺だけだ」

俺が言う。

「俺が勝つたらこいつも勝ちにしてもらつ。あなたの孫にはそうしてもらつた」

「どうか昨日の時点では再起不能にした。剣商人が今日、銃を渡したが碗器のことは忘れていたんだろう。

「そうか。いいだろ？名乗りをするのだ」

「そういえば、昨日から一回も名乗りっていない。別にどうでもいいけど。

「俺の名は水裂刃だ」

鉄球と名乗り（後書き）

遂に名乗りました。が、あまりインパクトが足りなくなってしまっている感じがします。実際にはちゃんと初めから名前は決まっていますが中々紹介することが出来ず、ズルズル引っ張つていった結果、雷切や西条という名前が出てきてしまい、インパクト不足に感じられます。が、しかし！ 水裂刃が主人公！ どんどん、カッコ良く、書いてゆきたいです！ これからも、どうぞお楽しみ期待（お頼み申す）！

「水裂、か」

「どうした？」

「懐かしい名前と思つての」

「水裂！？」

駿撃一世のいい雰囲気をぶち壊した剣商人の声が響く。
「水裂つて、偶然だよな！」

「何が？」

「本当か！」

「かなり強いぞ」

剣商人は興奮している。

「俺たちはそいつに会いに来たんだ」

剣商人も駿撃一世も驚く。碗器は頷いている。

「やつと思ひ出してくれましたか。そもそもの目的はそれですからね」

「始めから分かつてゐるぞ」

失敬な！ あれ、駿撃一世の口調が若干うつつてる？
「でも、あそこまではきつこぞ」

「あいつに会わないと俺は師匠に殺される。その方がきつこ
ね」
碗器も頷く。

「そんなに怖いのか。お前たちの師匠つてのは」

「怖いなんてもんじやない。悪魔だ」

「その師匠の名をなんといつ？」

駿撃一世は知つてゐるのだろうか。とりあえず言つてみる。

「雷切」

「やはりな」

「え、まで全部言つてませんよ」

「よいよ。大抵、そういう噂を出されたやつは相場が決まっておるのだ」

「うちの師匠も相場に入っているんですか？」

「最上位じゃな」

「だろうな。あいつはヤバい。

よし、じゃあ、そろそろやるか。

「それにしても大きい大砲ですね」

「ん？ そしたらどうだろ。触つてもいいぞ」

「いいんですか？」

俺が急にゴマすり口調になつたのに気づいたのは剣商人くらいだろう。だが、何も言つてこない。

俺は大砲に近づく。『空切水斬』の鞘を左手、柄を右手に持ち、前に出しながら礼をする。

「ふむ。いい心がけじゃ。流石、雷切の弟子だな」

「ありがとうございます」

「全然、ありがたくねえよ！」

「では、始めましょうか」

「そうだな」

俺は離れ、刀を抜く。

「居合いじやないのか？」

「は」

剣商人が碗器に訊く。

「居合いじやない技もありますよ」

「ふうん」

剣商人が納得したようだ。

「では、レディーファイト！」

碗器が仕切ってくれる。こつちはありがたい。

「先制攻撃をやるのだ」

「それもありますが」

俺は駿撃一世に礼を言つ。

「では、お言葉に甘えて」

刀を少しづつ入れ直す。

「居合い……」

少しづつ、少しづつ。

「不抜……」

そろそろいいか。
「五番刈！」

顔の前で刃が鞘に入つてカチンと音がする。その瞬間、『宝封砲』が6つに斬れる。

「なつ！」

「えつ！」

「わあ！」

駿撃一世、剣商人、碗器までもが驚く。

「いやいや、碗器は見たことあるだろ」

「いえ、僕が見たのは師匠のしたから、刃さんが出来るとは思いましたでした」

またしても失敬な。

「わ、わしの、わしの、わしの、ワシの、和紙の、鷺の、和しの、倭死の……」

イントネーションがおかしくなつていて。

「わしの『宝封砲』になんてことを！ 弁償してもらひやー。」

「これが勝負だらうが

「ぬううー」

駿撃一世は何も言えなくなる。そして、1つのボタンを押す。すると上からまた螺旋階段が降りてきた。

「早く上へ行け！ お前の顔など見たくない！」

「ありがたく通らせていただきまーすー！」

「ぬううー。」

駿撃一世は地団駄を踏んでいる。
俺と碗器は悠々と上った。

五番刈（後書き）

“どうやら”『あいつ』も同じ水裂であることが判明しました。といつても、私は刃の名前を考えるよりも先に『あいつ』の名前は決まつていました。いつか『あいつ』が出てきて、名前を言ってくれるはず！ それまで（長くなると思いますが）じつじつ期待！

あの人

「何だつたんだ、今の技は……」
剣商人が言つ。

「わしの『宝封砲』が……ほ、つほうほうが……」
「しつかりしてください！ 駁撃さん！」

「そ、そうだ！ 剣商人！」

「なんですか？」

「大砲を売つてくれ！」

「ないです」

「ないのか？」

「ないです。第一、あつたとしても持つてこれません」
剣商人は駁撃を突き放す。駁撃は頬み込むが聞かない。

「じゃあ、諦める」

「諦めますか」

「ないんだつたらしようがない。また、作り直す」
駁撃は剣商人が思つていたよりも潔かつた。

「それよりも、さつきの技、何なんですか？」 分かります？」

「あれは、何年か前にも見たことがあるのだ。水裂だつた。それと、
雷切。2人ともあの技でわしの大砲を壊してきた。そして3度目だ」

「同じ技なのに気づかなかつたんですか？」

「今の、刃という少年。今までで一番鮮やかだつた」

「鮮やか？」

駁撃は大砲の切り口を撫でる。

「綺麗に切れている……。おそらく、礼をしたときに切つたんだろ
う」

「え、でも、刀を抜いていませんでしたよ」

「彼も不抜使いなんだろう」

「不抜、ですか」

「実際には抜いているが早過ぎるのが故に抜いていないように見える技。いや、業」

「それをあの年齢で使いこなせるとは……」

「彼には才能というものがあるのだろう」

「俺は、あの水裂刃という少年を追つてみます。彼の強さを調べるために」

「それはいいことだろう。だが、剣商人。お前も相当強いだろ？」「いえいえ、あの人程じゃないですよ」

剣商人と駁撃が斜め上を見る。

「あの人とは、あの人か」

「あの人とは、あの人です」

「つまり、最上階の人」

「そうです。最上階の人」

「わしはまだ数える程しか会つていないが、お前は何回も会つているのだろう？」

「商売柄、毎年会っています」

「年々強くなっているんだろうな。あの人は」「そうですね。それでも、自分では衰えたなどと言つてているんですよ。あの人は」

「あの人は何故、こんな所にいるのだろうか」「何やら、計画があるらしいですよ」

「計画」とな

「内容を話してはくれませんが、何があるみたいですね」

「ほう」

2人は黙る。

「さて、そろそろ俺も刃君を追いますかね」

「来年、結果報告頼むぞ」

「有料ですよ」

「わしの塔払い、まだ残つたろう。そこから引き落としてくれ」

「承りました」

剣商人は駿撃に礼し、螺旋階段を上つていぐ。

「若いもんは元気があつてよいな。わしももう少し頑張らなくてはな」

そう言つて笑う。

剣商人の実力

「刃さん、1つ思ったことがあるんですが」

碗器が螺旋階段を上りながら言う。

「最初は駆撃九激さん。そのお爺さんの駆撃激燐さんですよね」

「それからどうした？」

「え、では、九瀬さんの新は誰なんでしょう、か？」

卷之三

そういえば、誰だ？ 剣商人は爺さんのことを駁撃一冊いた。そしてその孫が九激。その間もいるんじゃないのか？

「分かりません」

碗器が知ってるはずだ

アーティストの心

「ふつ。ここまで5分か。年取つたなー」
声が下から聞こえる。僕商人たる速い。一気に上がってきてくる

「え、5分って、僕たち15分かかりますよ！」

「君たちもまだまだだな」

力チーン

「何だよ！ おこがまさん、何だよそれ！」

「よし、競争だ！ 碗器俺に乗れ」

動搖する碗器を無理矢理肩車。

「位置に着いて、用意、ドンー！」

ダッショ！螺旋階段だろうがエスカレーターを逆走しようが走れる自信はあるぞ！

スピードアップ。

「ひやいばしゃん。ちょまつちえ、ちょまあつちええちゅひやぢゃい！」

何言つてるのか分からぬ。無視だ。

俺はチラツと横を見る。誰もいない。やっぱり剣商人なんてこんなもんだ。

「じゃあ、これくらいでハンデオッケーかー？」

剣商人の声が聞こえる。見ると剣商人は一步もスタート地点から動いていなかつた。ナメやがつて！

「勝手にしろ！」

俺は怒鳴る。

「オッケー。レツツ、ゴー！」

バン、と音がする。そしてあつという間に剣商人に抜かれる。

「ゴール！ やつたー！」

剣商人は次の部屋に着いたのか喜んでいる。大人げない。が、それ以上に俺の実力不足だ。あんなに速い男がいるだなんて。師匠は人間じゃないからまだよかつたがあれは何なんだ。あつちも化け物か？

俺はやつと次の部屋に着く。

「疲れた……」

剣商人に負けた所為で余計疲れた。

「大丈夫ですか？」

碗器を肩車していた所為でもあるが、こいつは俺が自分で乗せた。

まだ許せる。

「さんげき惨激さーん！」

剣商人が部屋にいた男の元へ行く。俺たちも続く。

「よう、剣商人」

「今年も会いに来ました！」

「そつちは挑戦者か？ 今年は1人目だな」

「まだまだ、10月は長いですけどね」

惨激という男と剣商人は笑う。

「じゃあ、自己紹介だ。駁撃九激の父で駁撃激燐の息子、駁撃惨激だ」

「やつぱり一世の登場だ……。

「さて、君の名前も……」

突然、地鳴りがする。

「何だ？ 地震か？」

「いや、これは足音だな」

「え？」

全員が螺旋階段の方を見る。ポン！ といつ音が似合いくそうな感じで青い球体が部屋に入ってくる。

「ボール？ 何でこんなものがここに」

駁撃二世がボールを掴む。その瞬間、ボールが跳ねる。そのまま駁撃二世の顔に当たる。駁撃一世が吹っ飛ぶ。啞然と見つめる俺たち。ボールは跳ね続けている。

ドガガガガガガン！ また地鳴りがする。螺旋階段の方からだが、今はボールに気を取られて何が起こったのか見に行けない。

「何だ？ このボールは……」

俺は呟いた。

大和忍術

「こいつは……まさか……」

「剣商人さん、知ってるんですか？」

「知り合いにこれを出来るやつがいるんだ」

「出来る？」

「どういう意味だ？」

「これは、大和忍術の一つ、変態」

「大和忍術？」

「変態？」

ボールが空中で止まる。そして、徐々に変形し、人の形になった。

「どうも、こんにちは。大和忍術支笏湖支部師範、宇比地と申します」

「宇比地……何かで読んだことがあります！」

「ふうん」

「俺は興味なし。

「支笏湖、だと？」

「はい。それがどうか致しましたか？」

剣商人は悩んでいる。何に悩んでいるかは分からない。

「何で、支笏湖からここまで来たんだ？ ここは阿蘇山だぞ」

「こいつて阿蘇山なんだ。知らなかつた。碗器に訊く。

「えつ！？」刃さんは阿蘇山だと知らなかつたんですか！？

「どうやら碗器は知つていたみたいだ。

「この宇比地というやつは塔の為に支笏湖から遙々阿蘇山まで来たのか。師範なのに暇なのか？」

「最近、大和忍術志願者が少なくて暇になつてているのです。君もやつてみますか？」

「やらない」

「志願されるならばいつでも修練生になることが出来ますよ」

俺は居合いでやつていくつもりだ。忍術なんて使わない。

「そうですか。残念です」

宇比地は残念と言つておきながら全然残念そつじやない。

「どうして、ここに来たんだ？」

大切もいいじゃないか、と剣商人が呟いた気がする。何が大切なんだ？

「何重もの塔、というのは強き者が集まつているとインターネットに書いてありました」

忍術使うのにインターネットやるのか！

「忍者は情報が命なのです」

宇比地が勝手に答える。

「だから、ここに来たのか」

あの人には訊かないと駄目だな、と呟く剣商人。あの人って誰だろう。

「大和忍術って何なんですか？」

碗器が訊く。俺も気になつていてのことだ。

「大和忍術というのは、遙か古代から続く、古き良き書き好き好き忍術です」

「どこが善いんだか、と呟く剣商人。

「私の支笏湖、そして岩木山、霞ヶ浦、甲武信ヶ岳、能登半島、剣山、琵琶湖、比婆山、桜島、雲仙岳に支部があるので」

「支部？ 本部はどこにあるんだ？」

「それはお教えすることは出来ません。修練生になるのでしたら話は別ですが」

つまり、修練生になれば教えてくれるってことか。まあ、修練生になつてまで聞きたい訳じやない。

「残念です」

例によつて残念そうに見えない。

「君！ ここで会つたのも何かの縁。一度、勝負して頂けないでしょくか？」

俺を指差しながらそう言つ。勝負か。悪くないな。

「オッケーだ！ やろひづぜ！」

俺は『空切水斬』を構える。碗器と剣商人は俺たちから離れる。

「なるほど、居合いでですか。では、そちらからどうぞ」「居合いで先手を譲るなんて、こいつもまだまだだろうな。

「じゃあ、遠慮せずに。居合い、おうだん横断」

スタンダードな居合いで。抜いてそのスピードで横に切る。

「大和忍術。超真剣、白羽取」

宇比地は『空切水斬』を止める。

「おいおい、居合いで白羽取するなんて聞いたことないぞ」

「私もここまで速い居合いで初めて見ました。このままでは私は切れてしまいかねませんね」

ですから、と続ける。

「大和忍術。盗み盗り（ぬすみどり）」

宇比地がいなくなる。

「あれ？」

『空切水斬』が放された反動で前のめりになる。が、踏ん張る。

「これで倒れるような男じゃない。」

「これで居合いで使えませんね」

宇比地は後ろに立っていた。そしてその手には、

「『空切水斬』の鞘！！」

左手を見ると鞘がなかつた。

大和忍術（後書き）

今回は色々伏線を張つたつもりです（プロを真似て）。この伏線がどう生きるのか（この物語はどう続くのか）乞うご期待！

「居合いが使えなかつたら別の技を使えばいいんだ」
俺は『空切水斬』を田の前で構える。同じように宇比地も鞘を構える。

「刃対鞘だぞ。刃が勝つに決まつてゐるだろ」

「それはどうでしようか。これは『空切水斬』のようですから、意外と違う結果になるかもしませんよ」

何を言つてゐるんだか。鞘には可哀想だが、鞘を切つてでも宇比地の野郎を倒すぞ。

「俺が居合いだけだと思つたら大間違いだぞ。確かに得意なのは居合いだ。極めようと思つてゐる。だが、刀の使い方は色々あるんだ。それを活かした戦い方が尤もあつてるだらう」

「では、やつてみてください」

「一々、馬鹿丁寧な奴だ。そんなに斬られたいのか？ それとも『空切水斬』と俺の技に勝てるとでも思つてゐるのか？」

「既に抜いてあるから、既抜^{いきばつ}。そして、技は普通、居合いでの派生技みたいな感じで使うんだが、今日は特別だ」

突当りや電式の基本形。

「既抜、逸奔^{いっぴん}未知」

右手に構える。刃先を真つ直ぐ宇比地に向け、左足を踏み込む。そして、突く。

宇比地は左手に構え、鎧を真つ直ぐ俺に向け、右足を踏み込む。そして、突く。

カーン、と刃先と鎧がぶつかる。

「なつ」

「有り得ない。俺の技が当たらないだと！？ いや、全く同じ動きをされた！？」

「大和忍術。鏡映し（かがみうつし）」

宇比地が言う。だが、俺はそんなの聞こちやいない。

「既抜、突当り！」

これは居合いだろうとからうと出せる技の一つだ。そして、既抜の中でもトップクラスの速さで突く。

しかし、カン、カン、カン、と刃先と鎧が当たる音がするだけだ。 「中々速いですね。私も追いつくのでやつとです。反撃はまだ駄目ですね」

何なんだ、こいつは！ いや、大和忍術つてのがすごいのか？ どちらにしてもこいつは倒さないとな。倒して、鞘を出来るだけそのままの状態で取り返す。

「何重もの塔。転じて別名、難波なる塔。その挑戦者たる者はどれほどの実力なのかを測るうつと思つたのですが、この程度ですか」「なんだと！？」

話している間も手は止めない。カン、カン、カンと音がする。

「上、下、右、下、上、左、右、下、右斜め上、下、右、左斜め下、中央、右、下、右、上、左、右斜め下、上、左、下」

突然、そんなことを言い出した宇比地。

「この順番で君は突いてきますね」

言われて刃先を見る。ただ、突くことだけに偏つて、場所は意識していないかった。上、下、右、下、上、左、下……。

「君は単純。だからこそ、強いのでしょうか。少なくとも常人よりは。だが、私たちはそのような人すらも超越します」

カン、カン、カンと音が鳴り続ける。

「なので、君のような私たちにしてみれば青二才同然の一人ですよ」「なんだとお！」

俺はスピードを更に上げる。だが、宇比地は普通に、片手で、しかも目を閉じて、ピッタリ受けていた。

カン、カン、カン……。

「やめだ！」

攻撃を止める。同時に宇比地も動きが止まる。

「鏡映しつていうのはそういうことか」

「分かりましたか」

宇比地は微笑む。

「では、鏡映しはもう使いません」

「は？」

「この忍術は結構疲れるんですよ。ですから、もう使いません」

「舐めてんのか」

「いえ、私が疲れるんです」

勝手にしてる。

「じゃあ、俺の攻撃で一気に終わらせてもいいのか？」

「どうぞ、『ご自由に』

「この野郎、微笑みじやなくて、薄ら笑いじやねえか。

「既抜、夜躊躇」

足は動かさず、『空切水斬』を十字に振る。

「ほう、衝撃波の類ですか」

よくRPGとかである技だ。カツコイイから練習して習得した。結構気に入っている。居合いや不抜だと更に威力も速度も上がるんだが、この際は仕方ない。

「大和忍術。超真剣、白羽取」

宇比地が鞘を手放し、両手で衝撃波を掻む。そして、それを投げる。飛んだ先の壁が切れる。

「おいおい、衝撃波を掻むってなんだよ！ 投げるってなんだよ！ 人間業じやねえだろ！」

「私たち、大和忍者は人間以上神同等なのです。私たちにそのような攻撃が通じる訳がありません」

そう言いながら宇比地は鞘を拾う。

「くそお！ 既抜、野躑躅やつじゆ」

『空切水斬』を8回振る。8本の衝撃波が宇比地へ飛ぶ。

「まだ自分の不甲斐無さや意氣地無さ、そして弱さが分かつていな
いようですね」

宇比地は溜息を吐く。その瞬間、衝撃波が全て宇比地に当たる。
「やつた！ 刃さん、倒しましたよー！」

碗器が壊んでいる。

「何をはしゃいでいるんでしょうね、あの子は」

後ろから声が聞こえる。前を向くと宇比地はない。

「大和忍術。蜃氣樓じきろうとこつ技ですよ」

後ろを向く。宇比地が俺の真上にいる。そして鞘を俺の頭に真つ
直ぐ当てようとしている。

右腕を振つて、『空切水斬』を当てるやう！

「無駄です。遅いです」

その言葉通り、鞘が俺の頭に当たる。が。痛くない。宇比地がい
なくなつていてる。

「このまま、君を倒しても面白くないですね。この鞘は返しましょ
う」

宇比地はいつの間にかさつきの場所にいる。そして鞘を投げてく
る。

鞘を受け取り、腰に差す。

「おー、どうこいつことだ？」

「その台詞は受け取つたときと言つたのでしよう。既に腰に差して
からでは、その台詞は活きませんよ」

知るか。

「君の居合の技を見せてこい覽なれ。私が全て受けて差し上げま
しょう」

宇比地は手裏剣を取り出す。かなり前に手裏剣は見たことがある
が、あれより、1回りも2回りも大きい。

「忍者っぽい物も持つてゐるのか」

「ええ。私は大業物程度の鞘なんかよりもこの最上大業物の『修理
帶劍』^{たいけん}の方が強いです、何より、使い慣れています」

使い慣れていなかつたら使えないだろうが。

「では、君。技を出してください。遠慮せずに」

宇比地はせせら笑う。むかつく野郎だ。

「はいはい。最初つから遠慮なんかするつもりじゃないですよー。」

始めから飛ばしているに決まつてゐるだろうが。

「不抜、十六躰^{じゅうろくたい}」

そもそも、不抜という技は『不抜』^{ぬかず}を書くが、実際は抜いている。だが、動きが速過ぎて傍から見ても抜いたようには見えない。だから『不抜』を呼ぶらしい。師匠の受け売りだが。

『空切水斬』を抜き、16回振る。当たり前のように、当たり前に16本の衝撃波が飛ぶ。

「16本。弾けない数ではないですね」

そう言つて手裏剣の真ん中を持ち、回し始める宇比地。青い絵が一瞬見える。が、そんなことに気を取られる時間はなく、衝撃波は全て手裏剣に当たる。そして全て弾かれる。宇比地の周りの床に何本も筋が入る。十六躰で切れたんだろう。

「やはり、この程度のものなんですね。無駄な時間を過^ごしました。ここで君を倒す時間すら惜しいです。なので、君は生かして置きます。もし、自分が強くなつたと言うのならば支笏湖へ来てください。いつでも相手になります。では、さよなら」

そう言つと宇比地は壁に穴を空け、外へ出て行く。

「なつ！ 待て！」

穴から頭を出して周りを見るが誰もどこにも何もない。

「くそ、逃げられた」

「君は助かつたんだ」

ずっと黙つていた剣商人が喋り出す。

「は？ 何言つてるんだ、あんたは！ このまま行けばあんなやつ

一発で倒せたんだぞ！」

少しムキになつて言つ。しかし、剣商人は平然としている。むかつく。

「今の君にはまだ無理だ。レベルが違う
「なんだと！」

「だが、この塔を制覇することが出来れば、若しかすると倒すことが出来るかもしれないな」

「さつきの人を倒せなかつたのに塔を制覇出来るんですか？」

「今のやつは大和忍者内ではかなり上の位なんだ。そんなやつ相手に刃君はよく頑張つた方だよ」

でも、俺は負けた。そして、逃がしてしまつた。

「やけに大和忍者に詳しいな。どうしてだ？」

「俺の親友が大和忍者なんだ」

「なんだと？」

「剣商人の友達、いや、親友が大和忍者だと？
まあ、親友と言つてもかなり昔の話だけどな
だが、親友だつたことには代わりないだろ？
「ということは、俺の敵だな！」

「いやいや、落ち着け、刃君！」

「俺は落ち着いてるぞ！　落ち着いた上でこいつの判断をしてるんだ！」

「刃さん！　十分、動搖しますよ！」

碗器に宥められる。なんで碗器は普通のままなんだ？　まるで、
剣商人が大和忍者と友達というのを知つていたかのように。
「刃さんと宇比地さんが戦つている間に剣商人さんと話してました
から」

そういうことか。

「で、その親友ってのは誰だ？」

「それは教えられない

「何でだ？」

「教えられないからだ」

「どういうことだよ。

「気にするな。気にしてはいけない」

「まあ、どうでもいいか。誰だつたとしても俺が倒してやる！」

「何故、大和忍者を敵視するんだ？」

「何故って、えっと、何でだろう

自分で分かつてない。

「そうだな……。男だから？」

碗器も剣商人もポカーンとしている。

「1回、負けたんだ。だから俺はあいつ、いや、大和忍者自体をぶ

「壊してやる」

「勝手にしろ」

「勝手にしてください」

「ノリ悪いな。どうしたんだ？」

「大和忍者なんて壊滅させる意味があるんですか？」

「今のところは分からぬ」

「分からぬって……」

「そういうことにしどけ」

「はあ……」

「納得してくれよ。男だろう。

「でも、やめといた方がいいぞ」

「ご忠告ありがとうございます」

剣商人に対して俺は思いつきり皮肉った。つもり。

「でも、俺は男として男なりの一言のなをを見せ付けてやる。分かつたか」

「男に一言はない、とでも言いたいのか？」

「言いたい、じゃない。言つた」

「言つたんだつたら前言撤回しろ」

「前言撤回」

「そうだ。馬鹿な真似は考へないで塔を制覇することだけ考へればいいだろつ」

「さつきの前言撤回といつ言葉を前言撤回」

「は？ 何を言つている？」

「俺のことは俺が決める。剣商人如きが俺に口出しをしないでほしい。口出しするな。俺はやると決めたらやるんだ。分かつたか？」

「剣商人さんよお」

「勝手にすればいい。だが、大和忍者は相当強いぞ」

「しつこいな。

「その分俺も強くなればいいだろつ」

「問題解決。

「その為には塔制霸だな」

「そういえばすっかり思いつきり忘れて蚊帳の外にしていた、駁撃二世はどこだ？」

「駁撃二世も倒さないと塔制霸にはならないんじゃないかな？」

「いや、あの人を倒せばそれで制霸だ」

「あの人？」

「そう。今は最上階にいる、あの人」

今は、か。何かありそうだな。まあ、そこまで行けば分かるだろう。

「じゃあ、取り敢えず今は、大和忍者とか、宇比地とか、考えないで制霸だけを目的にすればいいってか？」

「そういうことだ」

いつから、剣商人は俺に指図出来るようになつたんだか。

「ま、いつか。では、レツツゴー！」

「ゴー！」

ガキか、と剣商人が呟いた。気がする。

「で、やつぱり上か
天井を見上げる。高い。駿撃一世のところからいまでも結構長
かつたけどそれ以上だ。

「いや、上じゃない

「え？」

「ここがどこだか分かつてるか？」

「何重の塔じゃないんですか？」

「違う。ここは何重の塔の子分みたいな立ち居地の駿撃塔だ。駿撃
一世から三世までがここにいる」

いた。

「じゃあ、ここは本番じゃないのか？」

「そういうことだ。この塔は何重の塔の西側の地下に作られている

「何でだよ、始めから塔に入れろよー」

「始めから入れるのは2回目以降だ」

「2回目？」

「ああ、つまり常連さんだけってことだ

常連なんているのか。

「つまり、こつちはチュートリアルみたいなもんなのか？」

「言つてしまえばそうだな

つまんねえの。

「初心者モード、難易度低、敵キャラ少、敵キャラ攻撃力低、防御
力低、素早さ低、そんな感じだ」

「なんだよそれー」

「お、おい。剣商人。それは失礼じゃないか

「ん？」

俺たちが声が聞こえた方を向く。駿撃一世が立っていた。

「惨激さん！ 起きましたか！」

剣商人がすぐさま駿撃一世に駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「心配ない。この程度

「駿撃一世は倒れる。

「大丈夫じゃないじゃないですか」

「じゃないじゃないって意味分からぬ。」

「大丈夫だ。寝れば治療人が来る」

「そういえばそんなやつがいたな。夜行性なのか？」

「でも、それは夜までに生きていた場合ですよ」

「生きてるだろ。もうじき夜だ。大丈夫だ」

「そういえば結構時間経つたな。」

「扉は開けておいた。さつさと行け」

「扉？」

「分かりました。刃君、碗器君、行くぞ！」

「え、あの、え、駿撃一世さんは

「俺のことは気にするな。早く行け」

「は、はい！」

「行くつてどこだよ。

俺たちは螺旋階段のところまで行く。が。

「そうか。さつきの音はこれだったのか」

螺旋階段は崩れ去っていた。

上から見ると辛うじて駿撃一世の大砲が見えるかどうか、といふところだ。

「なあ、さつきの扉つてなんだ？」

「駿撃塔から何重もの塔へ繋がる扉だよ」

「どこにあるんだ？」

「駿撃九激さんのところ

「一番下じゃねえか。

「じゃあ、どうする？」

あの青忍者野郎、許さねえ。絶対あいつが壊したんだろう。

「俺はここから飛び降りても大丈夫だが君たちはどうだ?」

碗器の顔が真っ青になる。首を横に振る。

「俺もこれくらいなら大丈夫だぞ」

碗器の顔が更に青くなり、汗が滝のように流れまる。

一
硯器君は出来なしみたしたね

「俺は碗器が乗ってしても大丈夫だぞ」

俺も碗器君くらいなら大丈夫だ。さすがに刃君は無理だな」と思

でしたから心配してました

ええ、むづむづになってします？

「分子生物学」

「其二」同上

「勿論、ここから飛び降りる話をしているんだぞ！」

「心中ですか！？」

「何でそうなるんだよ」

面倒なやつだ。

「剣商人、さつさと行つちやつて」

「言わなくても行くから心配するな

そう言つたかと思うと碗器を背負い、

」ナニヤー！？！

碗器の女々しい悲鳴が聞こえる。

ドカン、と音がする。

「おーい！ 刃くん！ こつちは着いたぞー！ 降りてこーい！」

剣商人の声だ。

「りよーかーい！」

「空切水漸」を腰から外し、降りる。

梢を立てて床と垂直になるようにする。俺って結構平衡感覚ある

じ
ん。
じ

そのまま、鞘から床に着く。というか、突く。鞘が埋まる。でも、

俺は無事。結果オーライ。

「おいおいおいおいおいおい！　『空切水斬』でそんな使い方するなよ！」

剣商人が怒鳴りながら駆け寄つてくる。その脇にはぐつたりしている碗器。

「でも、ほら、壊れてないぞ」

『空切水斬』を抜いて、剣商人に見せる。

「そりやそうだろう。最上大業物にも通じるぐらいの硬さを誇つてるからな」

今のは青忍者野郎が鞘で戦つて硬いのを分かつたからやつてみた。名前は後で付けよう。

「でも、師匠の刀の方がもっと硬くて、もっと大きくて、それなのに居合い出来てたからなー。まあ、その分、運が悪くなつたとか変なこと言つてたけど」

「運が悪くなつた？　それつてまさか、最上大業物の『一等両断』じゃないか！？」

「あー、そうそう。そんな名前だつた」

剣商人だから知つてるのは当たり前か。

「『一等両断』つてのは最上大業物の中でも最高級の刀だぞ。あの刀を使いこなせる人なんて見たことないぞ。確か何年か前に剣豪、剣持切傷けんもさいじょうさんがどこかの誰かと『一等両断』をかけて戦つて、負けて、それ以降行方が分からなくなつていて武器じゃないか」

「そんな歴史があつたのか」

「あの剣豪、剣持切傷でさえも、使えなかつたのに……」

「師匠が使つてる。振り回して」

「11月になつたら会わせてくれ」

何だが、フラグつぽい台詞だいしだな。

「ああ、いいけど。強いやつとしか会わないぞ」

「刃君よりも強い。大丈夫だ」

「むかつく。むかついた。

「絶対にいつか勝つてやる
俺は決心した。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9564x/>

何重もの塔

2011年11月20日03時21分発行